Alumni Association of Faculty of Science, Niigata University Newsletter No.22

新潟大学理学部同窓会

会報

第22号　2021.08.01

会報によせて

理学部同窓会長　武　石　文　雄

冒頭、大変悲しいお知らせですが、前会長野本憲雄様が５月にご逝去されました。個人的にも大変お世話になった方ですので、大変残念な思いで一杯です。これまでの同窓会の発展にご尽力されたことに感謝申し上げますとともに、ご冥福をお祈りいたします。

今年もコロナの影響で、大学の多くの授業はリモートで行われているようで、大学構内の学生の数はまばらのようです。多くの学生にとっては大変な時代だと思いますが、数学のように自分の頭の中で新しい体系を再構築したり、創造したりしていく勉強には、時間のとれる‘リモートの授業もあり’なのではないかと想像しています。

私は50年ほど前に数学科に入学しました。当時、理学部は西大畑のキャンパスにあり、一コマが２時間でしたが、多くの授業の開始、終了は厳格ではなく、時間にはあまり縛られていなかったという印象があります。学生は自分で勉強するものという意識が強く、夏休み前は、先生が休むか、学生の多くが出席しないかで、必然的に休講になっていたと思います。さらに、学園紛争で多くの授業ができない状況で、時間的にも余裕があり、有志の学生だけの自主ゼミや先生に頼んでのゼミなども積極的に行われていました。入学当初、数学の公理的構成に興味を持っており、当時読んだデデキントの「数について」、高木貞治の「数の概念」、岩波の「数学概説Ｉ」や数学史の本などは、その後の私の数学観をつくってくれたものと思っています。

理学部が五十嵐キャンパスに移転したのは３年生のときです。当初移転したのは理学部と教養部だけです。西門と理学部より南側はすべて松林、５階の数学科の教室から見えるのは、海までのすいか畑と松林だけでした。現在，年に数回同窓会等の用で大学に行きますが、理学部正面の駐車場は狭く２列に車を止めるのには苦労します。当時は車もなく、昼休みに数組がキャッチボールをするほど広い場所だったのです。現在からは想像もできない風景が思い出に残っています。それから50年、この間の時代の変化にはすさまじいものがあったと感じています。

昨年の会報で物理学科甦沢支部長よりお知らせしましたが、野本前会長退任後の会長選出ができず、会長が決まるまで各支部長が会長職務を代行して行こうとなりました。しかし、諸事情から会長不在のままでは不都合があるということで、その後も支部長会議を何回か開きましたが会長選出できず、当面、会長を選出できるまで支部長が輪番で会長を引き受け、この状況を解決していこうということになりました。ご挨拶が遅れましたが、この案で、３月にメールによる臨時総会を開き、会長に選出されました数学科支部長の武石文雄です。よろしくお願いいたします。

「題字」　会報の文字は元学長、津田禾粒先生によるものです。

理学部の近況

理学部長　**大　鳥　範　和**

2021年４月から、前野前学部長の後を引き継ぐことになりました。もとより非力ではありますが、持てる力は全て注ぐ所存です。

今年度も、コロナ禍の下で新学期が始まりました。昨年に引き続き入学式は中止となりましたが、昨年はオンラインだった新入生ガイダンスを今年は対面で実施でき、全員の顔を直接見られたのは僥倖でした。共通テストや個別試験の開催まで危ぶまれた今年度の入試を無事乗り越えて入学された皆さんに心からのお祝いを申し上げ、併せて、身体的には孤立しても、精神的には孤立しないよう、新たな友人関係の構築を促したところです。

授業も昨年同様、実験・実習科目を除いて基本的に非対面型方式で実施されています。２年生以上は昨年に続いて２年目ですが、現２年生は、昨年度、入学したばかりで突然この状況におかれて、大学での授業の要領も得ない中、通信環境のトラブルにも遭遇し、一方の教員も慣れない状況下で授業の準備に追われ学生に対する十分なケアができず、さらに期末試験の代わりにレポート課題を課す授業が急増し、学生の皆さんはさぞ大変だったと思います。特に、４月からアパート生活を始めた学生は友人関係の構築もままならず、孤立した状態の下での学修という過酷な状況だったと推測します。そのような経験をした今年の２年生にも、ガイダンスは対面式で実施することができ、多くの笑顔が見ることができたとの報告が担当教員から学務係に寄せられひとまず安堵したところです。また、昨年度の４年生の研究室活動も当初は大きく制限され、その後相当緩和されたものの、前半の制約は最終的な課題の達成度に大きな影響を与えたものと推測されます。結局、卒業式も中止となりましたが、改めて就職された方の社会人としてのご活躍と、進学された方のご研鑽をお祈りします。

さて、理学部はこれまで高大連携活動に積極的に取り組み、地域の科学教育の高度化にも貢献して参りました。昨年は、2016年から続いていた「中高生のためのシンポジウム」が一旦中止となったものの、今年11月３日に延期して開催されることになりました。講師は、2008年にノーベル物理学賞を受賞された小林誠先生（高エネルギー加速器研究機構・特別栄誉教授、名古屋大学特別教授）、講演タイトルは「消えた反物質の謎とＣＰ対称性の破れ」です。参加費無料で、どなたでもご参加頂けます。同窓会の皆様も是非お気軽にお申込みください。なお、感染症の流行状態によってはオンラインでの講演に変更の可能性があります。申込方法や開催形式は理学部ホームページ上（https://www.sc.niigata-u.ac.jp/sc/info/symposium2020.html）で随時お知らせしますので、適宜ご確認願います。

最後に、学部長に就任するに当たりまして、任期中に取り組むべき課題について申し上げます。学部長の経常的な任務は多岐にわたりますが、理学部の近い将来を見据えて、特に次の２つを掲げます。

一つはＡ１棟の改修工事です。理学部棟は、Ａ１棟の他、Ａ，Ｂ，Ｃ，Ｃ１棟からなりますが、耐震・改修工事が、2002年からＡ棟を皮切りに進展し、現在Ａ１棟を残すのみとなっています。昨年の概算要求では最終的に財務省の選に漏れたものの、この数年の間に予算措置が実現する見込みです。課題としますのは、工事期間中の室内の物品等の一時移転（引っ越し）にかかる経費の捻出と一時移転先のスペースの確保です。経費は理学部でも相応分の負担が求められ、またスペースは理学部棟外の全学に借用を依頼する必要があり、同時期に改修が見込まれる他の建物（学部棟）との間で調整が必要となる見込みです。いずれも理学部はもちろん、大学全体への協力要請が不可欠な状況です。建物は次の世代への遺産でもありますので、改修工事は将来を見据える必要があります。これからは、従来の学科単位の占有スペースの考え方から、共用スペースの考え方へ、より一層の転換が求められていくと思われます。併せて、本学の次期中期目標が、社会連携の推進を基調として計画策定される見込みであることを考慮しますと、同窓会を含めた社会との連携を支える場としても広く活用されることが期待されます。

もう一つは、理学部の将来像です。折しも、新潟大学将来ビジョン2030が２月に大学のホームページ上で公開されました。一方で、2017年度から人事ポイント制度が導入され、同時にポイントの供出・削減が進んでいます。その結果、教員数は10％程度減少しましたが、将来回復の見込みはありません。一方、旧六と言われる他大学の理学部を見渡したとき、ほとんどが数学、物理学、化学、生物学、地学の基幹的学問分野、すなわちdisciplineの継承・発展を基本としています。逆に言うと、「理学部」の看板の下でこれらのdisciplineは不可欠とも言えます。人事ポイント削減が一段落した今、理学部の将来像を議論する時期に来ています。私たちは大きな岐路に差し掛かっていると言えます。

以上、就任早々、少々厳しい状況にも言及しましたが、新潟大学理学部は総じて大変恵まれた教育研究環境にあり、その恩恵に預かってきた者として日々感謝の念に堪えません。尊敬できる諸先生方と同僚、高い技能と事務能力を備えた職員の方々、そして何より我々教職員を刺激し活性化してくれる優秀な学生の皆さんとサポートされる保護者・同窓会・後援会の皆様のおかげです。２年間、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

プログラムだより

数学プログラム

プログラム長　小島　秀雄

　昨年度に引き続き今年度もコロナ禍の中、教員と学生・院生の活動も制約を受けています。昨年度は数学プログラムの講義は勿論のこと、学生・大学院生のゼミや研究活動もほぼ全て非対面での実施となりました。研究集会や学会等もオンラインで行われ、数学事務室の黒板に教員の出張がびっしりと書かれていた予定表が無くなってしまいました。今年度も数学プログラムの講義はほぼ全て非対面での実施になっていますが、ゼミの方は感染予防を十分に行いながら対面で実施している研究室もあります。数学プログラムで行っていた行事も昨年度は多くは中止となってしまいました。そのような中でも数学プログラム講演会は非対面ですが例年通り行い、４名の卒業生に講演して頂きました。

　昨年度は学部生39名、博士前期課程７名、博士後期課３名の方が卒業・修了されました。学部卒業生の殆どは数学プログラム最初の卒業生です。その内、学部生１名と博士後期課程１名の方がそれぞれ、素晴らしい学業成績と研究成果が評価され、新潟大学学生表彰を受けました。卒業式・修了式は規模を縮小してですが行われ、学部卒業生の方が各教員に花束と記念品を贈ってくださいました。大学生活の集大成となる最後の年度でこのような事態になってしまったことは教員にとって残念で仕方ありませんが、そのような状況でも卒業生の晴れやかな笑顔を見ることができたことは幸いでした。卒業生・修了生の今後の活躍を期待します。

　家富洋先生が本年３月に退職され、立正大学に転出されました。家富先生は物理学科で長く活躍された後、東京大学に転出しましたが、2013年５月に本学数学科に着任されました。数学プログラムでは主に統計関係の講義を担当し、先生の穏やかな人柄と研究内容に惹かれて多くの学生が先生のゼミに所属しました。家富先生の今後の更なるご活躍を祈念します。このような状況のため送別会も満足に行うことができませんでしたが、それに代わる非対面での行事を計画中です。

　数学分野は他の分野に比べると賞の数が少なく、研究関係での受賞の知らせは余りないのですが、昨年度は劉雪峰准教授が新潟大学学長賞（若手教員研究奨励）を受賞しました。更に、博士後期課程１年（当時）の中野泰河さんと劉雪峰准教授が日本応用数理学会論文賞（理論部門）を受賞しました。

物理学プログラム

プログラム長　浅賀　岳彦

　令和２年度物理学プログラムの卒業生は43名でした。平成29年度本学理学部は改組し、理学科１学科７つの主専攻プログラムによる教育体制となりました。今年度、新しい物理学プログラム初めての卒業生を送り出すことになりました。大学院への進学者は28名で、他大学へ６名、本学に22名が進学しました。また、企業等への就職率は100％を達成しました。県内企業に２名、県外企業に７名が就職し、教員になられた方が２名（県内１名、県外１名）となりました。

　物理学プログラムでは、令和２年度３月末日、大原謙一教授および宮田等教授がご退職されました。大原先生は平成５年５月に着任され27年、宮田先生は昭和61年11月に着任され34年にわたって、本学の教育研究に携わってこられました。大原先生は宇宙物理学を専門とされ、近年は日本の重力波観測装置KAGRAの計算機システム構築でも中心的な役割をされました。また、情報基盤センターのセンター長を９年間勤められるなど、本学に多大な貢献をされてきました。宮田先生は高エネルギー物理学を専門とされ、TRISTAN実験、Belle/Belle II実験など、日本での多くの国際共同研究で活躍され、高エネルギー物理学の発展に貢献されました。また、理学部副学部長、評議員、副学長を歴任され、本学の運営にも大きな貢献をされてきました。これまで物理学科（物理学プログラム）を牽引されたお二人が同時に退職されることは大変寂しい思いです。この場を借りて両先生に感謝申し上げます。さらに、超域学術院特任助教の関澤一之先生が、東京工業大学に転出されました。関澤先生の専門は原子核理論で、原子核理論研究室に加わり、物理学プログラムの研究教育活動に貢献されました。新天地でのご活躍を期待しております。一方、令和３年４月に物理学プログラムに新しい助教として佐藤優太郎先生が着任されました。佐藤先生の専門は高エネルギー物理学分野で、素粒子ミューオンの実験的研究を展開されています。教員の大きな移動がありましたが、若い佐藤先生の力も含め、教員全員で物理学プログラムを発展させていきたいと思います。

　コロナウィルス感染症拡大のため、教育研究の環境が大きく変化しました。教員だけでなく、学生の皆さんも、実験実習が制限されオンラインでの遠隔授業に対応するなど多大な努力をしてきました。物理学科（物理学プログラム）のケルビン祭もオンラインにて開催しました。恒例のバーベキュー大会はできませんでしたが、成績優秀者６名に対して、物理学科初代卒業生中山様の寄付金を基にした中山賞、および物理学科同窓会の支援により設けた物理学科同窓会奨励賞が授与されました。困難な状況の中工夫を凝らし学習を進め、優秀な成績を収めた学生を表彰できたことは大変良いことでした。同窓会奨励賞は2014年からご支援をいた

だいております。この場を借りてお礼申し上げます。With/Afterコロナにおける新しい教育研究を進展させるため、物理学プログラム全員で取り組んでいきます。同窓会の皆様、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

化学プログラム

プログラム長　梅林　泰宏

一昨年より続くコロナ禍で、保護者や学生の方々にはご心配が続いておられると拝察いたします。化学プログラムでは、Jorolan Haojoel先生が令和３年１月に任期付助教として、韓　智海（Han Jihae）先生が令和３年４月に特任助教として着任され、計16名の教員と３名の職員、総勢19名で一丸となって、教育だけでなく充実した学生生活をサポートできるよう取り組んでおります。

一方、本年の３月末に38名の４年生が無事卒業し、５名が県内外の企業等へと就職し、31名が大学院へと進学いたしました。残念ながら対面による通常の卒業式は行えませんでしたが、卒業された皆さんは新たな環境で活躍すべく切磋琢磨されているものと思います。大学院進学の31名のうち23名は本学大学院自然科学研究科数理物質科学専攻化学コースであり、今年度は例年より多くの学生が大学に残り、引き続き研究に励むこととなりました。出口の見えないコロナ禍の中、彼ら自身の研究に加え、後輩の研究指導も含め、ともに研究室を運営して行くことができることに教員一同に大きな期待と喜びを感じております。

この４月には入学試験を乗り越えた理学科学生１年生214名が入学しております。化学プログラムへは理学科１年生の中から推薦学生７名、Frontier science program（FSP）学生６名の13名が新たにに加わり、教員および職員共々で総勢98名の学生（１年生13名、２年生（推薦・FSP）11名、２年生１名、３年生37名、４年生36名）と新たな気持ちで大学での活動を行なって参ります。

化学プログラムでは「教員と学生」および「学生間」の結びつきをより強くにするため、様々な催しがあります。これは教員が主導するものもありますが、学生が主体的に計画するものもあります。入学後、直ぐに行なわれる催しとして、教員と１年生の推薦・FSP学生が参加する「化学プログラム新入生歓迎懇談会」、教員と１年生から４年生までの学部学生に加え、大学院生も参加する「縦コン」があります。残念ながら昨年度はいずれも開催できませんでしたが、今年度は、１年生と２年生、それぞれの「化学プログラム歓迎懇談会」を開催しました。これらの会を通して、より多くの友人や知人を作る良い機会にしてもらえればと思います。また、化学プログラムでは、新入生のみなさんの大学生活をサポートするため、担当の先生方がZoomを用い、授業の履修や日頃の生活状況の把握とサポートを積極的に行なっております。今後事態が改善すれば、「縦コン」も開催したいと考えています。化学プログラム全員が一同に介し、研究や勉学だけでなく、学生生活や将来の夢について語り合えるものと期待しております。

教職員一同、化学プログラム学生全員について、学修と生活の両面からしっかりと指導・サポートしたいと考えております。至らぬ点も多々あるとは思いますが、化学科・プログラム同窓会の皆様におかれましては、今後ともご高配、ご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。

生物学プログラム

プログラム長　長束　俊治

令和２年度の生物学プログラム及び生物学科の卒業生は32名（内１名は９月修了）でした。卒業後の進路は、進学19名、企業９名、公務員３名、教員１名で、就職内定率100％でした。コロナ禍のなか､昨年度もっとも懸念されたのは、適切に授業の単位を出せるかどうかでした。しかし学生さんたちの努力もあり、つつがなく卒業生を送り出せたことはまことに幸いでした。生物学科の学生数は従来約20名でしたが、改組により生物学プログラムになってからは毎年1.5倍の約30名が配属しています｡学生さんが多いと活気があり､様々に良い効果をもたらしています。特に、近年減少傾向だった大学院への進学者数が大幅に反転増加したことは、生物学プログラムにとって昨年度のもっとも明るいニュースになりました。今後も大学院、特に博士課程への進学者数を増やすことが、生物学プログラムの将来にとって重要な課題です。一方、学生さんの人数が増えて問題となっているのは、研究室の面積が増えていないことによる学生さんの研究スペースの不足です。また近年の教員削減（離職教員ポジションの不補充）もこの問題に拍車をかけています。教員人事の仕組みが大きく変わった今、理学部といえども従来どおり純朴な基礎科学の中だけに留まっていたのでは、時代の変化に対応できないのかもしれません。基礎生物学の継承と社会のニーズであるイノベーションへの対応という一見矛盾した課題にどう対処するのかも今目の前にある問題です。

本年度も引き続きコロナ禍による非対面型授業が続いていますが、実習や演習のうち、十分な対策を施せるものに関しては、対面型の授業も行われるようになっています。教員、学生共にオンライン授業に慣れてきましたので、昨年度当初のような混乱は見られなくなりました。しかし感染の状況はいまだ予断を許しませんので、今後授業形態がどうなるかはまだ不透明です。課外活動や交友などを含めた学生生活が、一日も早く通常の状態に戻ることを願っております。

世の移り変わりと共に、遺伝子やウイルスなどの生物学リテラシーが、通常の市民生活にも重要になっています。そのような中、生物学プログラムが教育と研究を通じて社会のために果たすべき役割は益々大きくなっていることを感じます。教員一同、生物学プログラムの継承と発展に向けて様々な努力をしてまいりま

す。同窓会の皆様におかれましては、引き続きご支援のほどよろしくお願いいたします。

地質科学プログラム

プログラム長　豊島　剛志

2020年３月に地質科学プログラムとして最初の４年生が卒業しました。地質科学科卒業生を含め、20名の卒業でした。また、新潟大学大学院自然科学研究科の博士前期課程の地球科学コースを７名が修了しました。地質科学科・地質科学プログラム卒業生のうち12名が同地球科学コースに進学しました。博士後期課程の地球科学コースには３名の新入生を迎えました。地質科学科卒業生・地質科学プログラム卒業生・博士前期課程修了生の就職先は、地質コンサルタント、建設コンサルタント、鉱業、公立学校、市役所などでした。博士前期課程修了生の就職先として、地質コンサルタント、建設コンサルタント、鉱業の比率が多くなっています。ありがたいことに、現在も、地質系の企業・機関・団体からの求人が多く、これらの業種に卒業生・大学院修了生が就職しています。また、博士の学位を取得した留学生が日本の大学教員になりました。

2021年度６月現在、地質科学プログラム４年生は25名で、３年生は13名です。１年生と２年生のうち、地質科学プログラムを選択すると考えられる学生数はそれぞれ10－15名と半減－３割減となっています。また、大学院自然科学研究科の地球科学コースには、博士前期課程に23名、後期課程に14名の大学院生が在学し、研究を進めています。そのうち外国人留学生が３名です。

今年度も昨年度同様、新型コロナウィルス感染症への対策のため、大学での教育・研究に制限が設けられています。例えば、2020年度の野外実習Ｂ（大巡検）は10月に県内の糸魚川を拠点に実施されました。西日本など、遠方に出かける計画ができませんでした。今年度は東北日本を予定していますが、新型コロナウィルス感染症の状況によって変更もあり得ます。講義に関してはほぼ「非対面型授業」が基本ですが、野外実習は対面で実施しています。新型コロナウィルス感染症対策を十分に施した上での実施です。卒論生や大学院生の野外調査・室内実験も対策を十分に施した上で実施していますが、６月15日現在、県外調査の自粛や実験室同時使用の人数制限などがあります。

好評をいただいている「地質の日　サイエンスフェスティバル in 五十嵐キャンパス」ですが、2020年度に続き、2021年度も、新型コロナウィルス感染症対策により中止となりました。新潟大学Weekの「地質まつり」も「地質科学_卒業生と在校生の集い」だけがZoomを用いてオンラインで行われ、地質技術者、教育者になった３名の卒業生による発表を画面越しに聞くことになりました。大変有意義な時間でしたが、非対面の寂しさも同時に感じました。

2019年度までは様々な形で海外実習・研修が行われましたが、2020年度は新型コロナウィルス感染症対策により皆無でした。

地質科学科から地質科学プログラムに変わっても、「フィールドワークのできる人材（野外地質調査能力の高い人材）を育てる」を第一の教育目標とする点に変更はありません。むしろ、この変化を、理学の基礎を多く持った人材を育成できるものと肯定的に捉えています。今後とも地質科学プログラムへの暖かいご支援を皆様から賜りたくお願い申し上げます。

自然環境科学プログラム

プログラム長　宮崎　勝己

令和２年度は自然環境科学プログラム第１期生を中心に、37名の卒業生を送り出しました。卒業生の内訳は、大学院進学が17名（うち内部進学13名）、就職が16名、その他が４名（未定者を含む）となっています。就職先の内訳は、公務員１名、教員１名、他14名は民間企業でした。

昨年度は最初から最後までコロナ禍に振り回された一年間でした。ほとんどの授業がZoomを使ったオンライン形式で行われ、特に年度の前半はキャンパス内も学生の姿がほぼ皆無、研究室の活動にも様々な制約が厳しくかかり、ラボ系、フィールド系いずれの課題研究もスタートアップには大いに苦労しました。後半になるとオンラインによる授業や会議にもようやく慣れ、当初頻発していたトラブルもめっきり少なくなりましたが、どうしても埋めがたい距離感の遠さをどう克服するか、教員・学生とも未だ模索が続いています。

例年朱鷺メッセで大々的に行われる卒業式も動画視聴となってしまいましたが、プログラム別に分かれての卒業証書授与式を、コロナ対策を十分に取りながら挙行することが出来ました。授与式に引き続き、昨年度で定年を迎えられた湯川靖彦先生と久保田喜裕先生に、退職にあたってのご挨拶をいただく時間を取りました。両先生とも、長年にわたり自然環境科学科・プログラムにおける教育・研究・運営に関わってこられたご経験に基づき、当学科・プログラムの来し方と行く末に関して大いに語っていただきました。両先生のこれまでの多大なるご貢献に対し、深く感謝したいと思います。

また当学科･プログラム事務室職員の佐藤深雪さんも、昨年度で定年を迎えられました。佐藤さんには、多くの学科･プログラムの学生そして教員がお世話になりました。私も新潟大学着任当初には、学科に関する様々なことを教えていただいたものです。同じく深い感謝の意を表したいと思います。佐藤さんの後任には和歌山県出身の北未紗子さんが就かれました。私の前任地も和歌山県だったのですが、娘二人の高校の先輩にあたるという奇縁もあり、今後の活躍を期待するところです。

新潟でもようやくワクチン接種が本格化し始めましたが、大学が通常運転に復帰するのはまだまだ先になりそうで、学生の勉学や生活に関する悩みや苦労も当分引き続いていきます。同窓会の皆様におかれましては、より一層のご指導ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

フィールド科学人材育成プログラム

プログラム長　奈良間千之

フィールド科学人材プログラムは、2017年に新設された理学部と農学部の教員が協働で授業や実習を担当する新しい学部横断型プログラムです。フィールド科学の中でも、生態学、環境動態、災害科学の３分野を柱に、多彩なフィールド科学分野の講義および実習科目が用意されています。理学部と農学部からそれぞれ10名ほど、計20名ほどの学生が所属でき、３年次後期の研究室配属には、当プログラムに所属する理学部と農学部の研究室のほか、佐渡自然共生科学センターや災害・復興科学研究所も含めて33の研究室を選択できます。これまでは大学院でしか教育研究の機会がなかったセンターの教員が授業や実習を担当することも魅力の一つです。農学部１年生向けの農学入門では、これら所属する教員がオムニバスで授業を担当しています。今年度より一部の実習が対面で実施されはじめ、学生は普段の生活に戻りつつあります。実習に参加した学生からは大学生活を実感できているという声が多く、野外活動で得た知識や体験をどんどん吸収していってほしいと思います。

在校生にフィールド科学研究の魅力を知ってもらうため、フィールド科学分野のプログラムや研究室を紹介するフィールドナビを毎年開催しています。これまでは、大学図書館１Ｆで開催していましたが、この２年間はコロナ禍の影響でオンラインで開催しています。プログラムの概要説明と研究室紹介が行われ、多くの学生がフィールド科学研究に関心を持ってくれることを期待しています。

フィールド科学人材育成プログラムでは、2021年３月に11名の理学部所属の卒業生をはじめて送り出すことができました。卒業生の内訳は、大学院進学５名、就職６名となっており、そのうち公務員が４名です。また、2021年４月より大学院自然科学研究科の環境科学専攻に「フィールド科学コース」が新たに設置され、12名の学生が進学しました。フィールド科学コースの必修科目の環境ガバナンス概論では、フィールド科学に関わる諸課題に取り組む外部講師の体験談を聞き、人間活動も含めた環境変化に伴う地域社会の諸問題を認識し、社会科学・人間科学的観点から課題解決のために議論する力を養うことを目的としています。与えられた課題についてグループで議論し、その内容を毎回発表する形式で、これまで体験のない授業内容に戸惑いながらも、学生同時で議論を深め、課題への理解が進む様子を感じています。

また、４月より助教の野口里奈先生が着任されました。野口先生の専門は、火星などの地形を研究する惑星火山学です。前職のJAXA宇宙科学研究所在職中には、小惑星リュウグウの地形データ解析、着陸点選定、オーストラリアでのサンプルが入ったカプセルの回収などに携わっています。フィールド研究にも力を入れており、アイスランド、ハワイ、三宅島、伊豆大島、草津白根山などの火山のほか、南極で活動されています。今後の当プログラムでの活躍が期待されます。

理学部 後援会 より

後援会会長　諸　橋　丈　之

新潟大学同窓会会員の皆様には、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。また、平素は理学部後援会の活動にご協力を賜り厚く感謝申し上げます。

昨年に引き続き、今年も新型コロナウイルスの影響で、令和３年度入学式も中止になりました。また、本来、朱鷺メッセで行われるはずだった、令和２年度卒業式も理学部の講義室で行われました。新入生、在学生においては一部対面授業はあるものの、ほとんどがオンライン授業となり、今までに経験したことのない事態となっております。

理学部の令和２年度の卒業生の進路状況は、卒業生216名中120名が大学院に進学、96名が就職されました。就職にあたり学生達が高い期待と評価がいただけるのは、ひとえに先輩である皆様方の社会でのご活躍の賜物であると大変感謝しております。

後援会としても昨年行われなかった特別講演会、国際交流事業関係の援助を含め、学生研修、実験・実習への援助、インターシップ関係等への援助、新聞の購読、大学祭の援助、学生用設備充実への援助など各種事業に引き続き協力して行きたいと思っています。

また、「本学部と家庭との連携を緊密にするとともに、学部の教育活動を援助し、もって大学教育の理念の達成に寄与する。」という理学部後援会の会則の目的にあるとおり、先生方と保護者が一丸となって学生をバックアップしていきたいと思っております。

同窓会会員の皆様には、学生が自信を持って社会貢献できるようにご指導そして応援していただけたらと思っています。今後ともご支援よろしくお願いします。

支部だより

数学科　　支部長　武石　文雄

令和３年も昨年からの新型コロナの影響が継続しており、対面での会議や行事等は全くできない状況です。３月にメールによる会長信任のための臨時総会が行なわれ、５月15日にオンラインにより理学部の役員会が実施されました。数学科の役員会はそれに先立ち、３月18日にオンラインで実施し、予算、事業の昨年度の報告、今年度の実施案ともに了承されました。理学部の代議員会は６月26日オンラインにより行われました。

＜リモートにより印南先生・羽鳥先生の退職記念祝賀会を実施します＞

さて、印南先生と羽鳥先生が2020年３月末日をもって新潟大学を定年退職されましたが、コロナ禍のため昨年度に退職記念祝賀会を開催できずに現在に至っております。両先生ともに長い間、新潟大学理学部数学科の学生の教育に尽くされましたので、リモートでもよいので開催できないかという声も上がっております。そのため、オンラインによる退職記念祝賀会の９月開催を目指して準備を行っております。詳しい開催情報や記念品代の振込情報等は同封の案内をご覧ください。

物理学科　　支部長　鈇沢　祐一

物理支部は、コロナ禍の中で例年と同じ物理学科の学生を支援する活動をして参りました。

６月のケルビン祭での表彰される学生３人に副賞として、それぞれ１万円の図書カードを贈呈し、他にチームチーチィングに対して２万円を援助させていただいております。

今後とも、どうかよろしくお願いいたします。

化学科　　支部長　畠野　弘通

同窓の皆様、１年以上続くコロナ禍の中、いかがお過ごしでしょうか。テレワーク、遠隔授業が普通のこととなりました。「新しい生活様式」には、慣れるしかないのでしょうか。

一方、学園祭は不可。オリパラは可能、しかも観客を入れて開催との主催者の方針には、疑問を感じています。

副会長会議３回は、対面でした。評議員会、臨時総会などは、新型ウィルス感染防止のため、メール審議、Zoom会議となり、役員の方々と参加いたしました。しかし、高大連携事業をはじめ各種の事業は、中止でした。コロナの収束を願うばかりです。

化学科支部の活性化を図るため、会員各位から新規事業の企画を募っております。事務局を通して、お尋ねいただければ幸いです。

今年も支部の活動にご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。

生物学科　　支部長　荒木　　勉

同窓生の皆さん、いかがお過ごしでしょうか。

新型コロナウイルスが猛威を振るい、日本でも第五波の襲来すら危惧され始めています。新潟県では、罹患者数が3000人を超え、いくつかの高等学校等でも、感染者出て休校措置などがとられたようです。頼みの綱のワクチン接種が早く全員に実施されることを祈っております。

このようなことから、令和２年度の同窓会活動は例年以上に何もなく、会議はすべてメールによる稟議でした。今年度に入ってからは、役員会と代議員会は流行りのリモート会議で行われ、初めての経験でしたが、最先端技術の尻尾に乗っかったつもりでおります。

さて、大学では来年３月の新理学部卒業生を、どの学科に帰属させるかを検討中です。各プログラムごとに旧学科生として扱うことにするか、それとも理学部一本に纏めるか、これから審議することになります。

最後にお願いです。生物学科同窓会の役員、代議員等、私を含めて高齢者ばかりになりました。特に、生物学科と理学部の事務局を兼任されている清水榮一さんが、２月以来入院され、長谷川さんお一人に仕事が集中しております。ぜひ、新しい方々への代替わりをお願いいたします。

地質科学科　　支部長　豊島　剛志

毎年当支部の支援のもと行われてきた「地質の日　サイエンスフェスティバル in 五十嵐キャンパス」は、2020年度に続き、2021年度も中止となりました。新型コロナウィルス感染症拡大防止のためです。新潟大学Weekでは「地質科学＿卒業生と在校生の集い」だけがZoomを用いてオンラインで行われました。参加者は卒業生・在校生・教員含め、32名でした。他の行事が重なったこと、Zoomでの初めての同窓会イベントであったことも影響したと考えられます。これまで通り、理学部玄関前の「秘酔」も開催され、卒業生・在校生・教員の懇親が対面で深められる日が早く来ることが望まれます。

2021年新年会は2020年と同様、新型コロナウィルス感染症対策により中止となりました。

2021年度の集中講義「土木地質学」の担当は、昨年度と変わり、山崎 勉氏（昭和59年度卒、国土防災技術株式会社）です。Zoomを用いたオンラインで授業が行われます。

プログラム制になってから、地質科学プログラムは専門力プログラムと総合力プログラムの２つに分かれ、総合力プログラムでは野外実習Ａ（進級論文）が選択科目となりました。しかし、ほとんどの学生が野外実習Ａ（進級論文）を履修しており、地質係企業・機関・団体への就職も多数を占めています。「野外地質調査・野外調査に基づく研究なら新潟大学理学部の地鉱・地質」と言われる伝統が続くよう、当支部はこれからも

教室への協力を続けていきます。同窓生の皆様には、地質科学教室（地質科学プログラム）と同窓会へのご指導ご鞭撻をいただきますとともに、変わらぬご支援の程、よろしくお願いいたします。

自然環境科学科　　支部長　尾原　祥弘

今年度も、新型コロナウィルスの感染拡大がおさまらず、皆様の生活にも大きな影響がでていると思います。同窓会の活動も、昨年度から会議や活動の自粛を余儀なくされています。

昨年度の総会は、第20回という節目であり、盛大なイベントをしたいと考えていましたが、コロナ禍の中で人が集まる活動は出来ないと考え、オンラインでの総会を行いました。役員としてもオンラインの総会を企画実施するのが初めてだったため、実施にあたっては、大学の先生にご協力をいただきました。今年度についても、オンライン総会を実施する予定にしています。県外在住の方や子育てのためこれまで参加できなかった皆様にも参加していただきたいと考えています。詳細は、同封されている案内文書をご覧ください。

また、今年度は大学との連携を深めたいと考えています。私が在学していた頃の先生方は多くが退官され、現在もいらっしゃるのは一名になりました。そして理学部改組から五年が経過しています。現在の状況を知って皆様にもお伝えしたいです。

最後になりますが、今後も同窓会の活動にご理解とご協力をよろしくお願いします。オンラインを活用して、今だからこそできる活動のアイデアやご意見がありましたら気軽にお寄せください。

全学同窓会からのお知らせ

▶ 各種イベント・事業の見送り

令和２(2020)年度に予定されていた新潟大学・全学同窓会懇談会、新潟大学・全学同窓会交流会、雪華支援事業等の年次イベント・事業は、コロナ禍の影響で開催・実施が見送られました。事業の縮小にともなって、運営委員会・理事会等の会議も必要最小限の活動となりました。令和３(2021)年度は秋の新潟大学・全学同窓会交流会を開催する方向で準備を進めております。ただし、６月末現在、対面式の講演会を行うか、オンライン開催とするか、未定の状況です。

▶ ホームページのリニューアル

令和２(2020)年度は全学同窓会のホームページをリニューアルいたしました。「全学同窓会写真館」の閲覧・写真検索が簡便になりました。キャリア情報(再就職の応援)も掲載しております。是非ご覧ください。

▶ 賛助会費納入のお願い

全学同窓会の活動には同窓生からの賛助会費が不可欠です。例えば、学生の課外活動（部・サークル活動）を応援する「雪華支援事業」の原資は皆様からの賛助会費です。事業への応募件数は年々増加しており（昨年度は募集見送り）、採択された事業は、母校のブランド価値の向上、好感度アップにも貢献しています。今後の事業拡大のためにも全学同窓会の賛助会費の納入をお願い申し上げます。

首都圏同窓会と私

新潟大学理学部首都圏同窓会の近況について

首都圏支部長　信　田　庸　二

昨年正月明けから新型コロナウィルス感染症が世の中を席巻し、リモート勤務が始まっています。通勤不要でどこでも勤務が可能となるため地方へのシフトが始まるかも知れません。昨年および本年６月の同窓会は中止となりましたが、首都圏ではいよいよワクチンの接種が加速しています。来年度の再会が期待されるところです。

コロナ前の第34回同窓会までは前野貢理学部長がおいでくだり、柔軟で広く学べる一学科への統合と７プログラム制への移行など理学部の近況をご紹介いただいています。理学部首都圏同窓会は昭和61年に始まり、サイエンスセミナーを中心に構成されています。近年は首都圏在住の卒業生からだけでなく、理学部の教官の方々からも話題提供をいただいております（2016年田中環先生（数学）、2017年家富洋先生（物理学）、2018年保野善博先生（化学）、2019年は内海利男先生（自然科学研究科））。2019年の内海先生の”リボゾームには触手がある”というストークタンパク質に関する話題は会員から特別な関心が寄せられ、それまで滅多にご参加いただけなかった高校教諭の方からもご参加いただきました。また、卒業生の国立科学博物館の神澤秀明さんからは、古代ゲノムデータからみた日本人の起源と成立についてご講演をいただきました。生命科学のメイントピックスを最先端の技法で開拓を進める話題に接して、今後の研究のいっそうの発展を期待しました。本同窓会の詳細は、ホームページhttp://itnetinc.co.jp/doso/をご覧ください。小型パンフレットも準備し、卒業式や卒業名簿でご案内しています。幅広い世代の卒業生の皆様のご参加をお待ちしています。

若手卒業生から（実社会に出て）

数学プログラム

2021年卒　馬場　智弘

私は理学部理学科数学プログラムを卒業し、現在長野県公立高校教諭として数学を教えています。また、部活動は男子バレーボール部の顧問をしています。新潟大学を卒業してからおよそ半年間働いて、再確認したことがあります。それは、「好きなことや楽しいことは、それだけで自分にパワーをくれる」ということです。教員という仕事は決して楽ではありません。教員の仕事は、普段の授業はもちろん、その準備や部活動指導、校務分掌や委員会など多岐にわたります。そんな仕事を曲がりなりにもこなしていけているのは、教員という仕事が楽しいからということに尽きると思っています。まだまだ教員としては半人前で分からないことばかりですが、自分なりにこの仕事を楽しんで頑張りたいと思います。

物理学科

2013年卒　関　　孝一

私は、理学部物理学科及び、自然科学研究科数理物質科学専攻を修了後、新潟大学理学部の特任助教として３年間研究を行っていました。そして今年の４月より、トヨタ自動車株式会社へ就職し、車両に関するデータ解析手法の研究開発業務に携わっています。大学と民間企業での研究には多くの違いがあります。しかし、これまでに学んだ、解決すべき課題の発見･解決法策の立案･研究結果の共有といった論理的な思考プロセスの基盤は大学と民間企業で共通しています。そこで、新しい環境で新たに必要となる知識･技術を補いつつ、大学での学びを活用することで、データの裏に潜む法則を明らかにするために日々精進しています。これからは、会社とともに安心安全な車社会の実現に貢献することで、大学で多くの人に育てていただいた恩を、少しでも返していけるように頑張っていきたいです。

化学科

2018年卒　荒井　奈々

大学院修士課程を修了後、愛媛に拠点を移し化学メーカーの研究員となりました。多くの研究員と関わりながら、無機材料の分析を行っています。業務を進めるうえで、研究室時代にご指導いただき培った、データとしっかりと向き合い考察する力はとても役立っています。

withコロナ時代への適応のため、当社ではIT化が進み業務効率が上がってきました。その効率化の取り組みでは、私の意見もいくつか採用され、仕事のやりがいを感じられることが多くなりました。一方で、Web形式による発表・会議が増える中で、物事を伝える力がまだまだ足りないと痛感しています。今後は、自分の意見をわかりやすく相手に伝えられるように日々精進していきます。そして、多くの方々と協力し合いながら、悲願の開発製品の事業化へむけて業務に取り組んでいきたいと思います。

生物学科

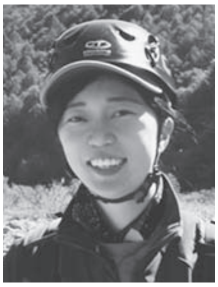
2019年卒　矢部あやか

今年の春に大学院修士課程を修了し、現在、福島県にある動物用医薬品企業に勤めています。自社の事業に関する基礎教育と社会人の心構えやマナーを学ぶ新入社員研修の後、医薬品の生産を行う部署に本配属となりました。配属された時期は繁忙期で、実務には手を出せない新人は、訳も分からないまま先輩に付いていく毎日でした。それでも徐々に簡単な仕事を任されるようになり、充実した日々を過ごしています。

会社は大学とは異なる環境ですが、学生時代に培ったものが活かされる場面が多々あります。データ処理や、実験器具の取り扱いといった技術的なことから、研究生活で得た「分からないを知りたい」という好奇心・探究心は、仕事をする上での強い武器です。これらを育んでくれた大学という環境と、それを与えてくれた家族に感謝して、今後も仕事に励みます。

地質科学科

2019年卒　菅野　萌子



私は今年の３月に大学院の自然科学研究科（地質）を卒業しました。現在は総合建設コンサルタントである八千代エンジニアリング株式会社の海外事業部で国内外の社会資本整備や技術伝達に関わる仕事をしています。日本は世界有数の特異な地質条件をもつ災害大国で、そこで培われてきた知識や技術は海外（特に途上国）にはない独自のものがあります。日本の社会資本整備に関わる技術は自国にとらわれることなく、「人を守る」ために利用できます。私が６年間新潟大学で学んだ地質学は一般的に知られていないのが残念なほ

ど、この社会資本整備の基礎を担う重要な知識であり、技術です。

今はまだ入社したばかりで大きな事はありませんが、研究と同様に探究心を忘れずに地球人のための技術者になれたらと思っています。

自然環境科学科

2019年卒　五十嵐陽大

私は2019年３月に理学部を卒業し、修士課程修了後、新潟県内の食品メーカーに就職しました。入社して数ヶ月間は工場研修を行い、配属後は全工場の統括を担う部署にて生産管理システムの導入に携わる予定です。工場研修で得た知識と経験を活かして、より良い生産体制の構築に取り組み、会社に貢献したいと考えています。

自然環境科学プログラムでは、分野を問わず様々な実験手法を体験しましたが、そのいくつかは研究のアイデアとして役に立ちました。そして、何事もやってみて初めて自分だけの気付きを得られることを学びました。仕事では初めてのことばかりで不安になることもありますが、大学で学んだことを忘れず前向きに挑戦したいと思います。

フィールド科学人材育成プログラム

2021年卒　渡部　侑果

私は新潟大学理学部理学科フィールド科学人材育成プログラムを卒業し、現在は新潟大学大学院自然科学研究科博士課程前期に進学しています。進学してからは、学部生の時からから研究している、佐渡島におけるシマヘビの食性に関する研究を進めています。何故佐渡島のシマヘビは魚類を利用するのか、またどの程度利用し、季節性などはあるのかどうか、地道に野外へ出て、シマヘビに関するデータを収集しています。フィールド科学人材育成プログラムが設立され、初めての卒業生となりましたが、このプログラムで学んだ、生態学についての知識や実習で複数回野外に出た経験は、現在の研究活動にしっかりと生かされていると感じています。今後ともこの経験を生かし、自分の研究をよりよい物とできるよう、精進して参ります。

理学部同窓会整備・振興寄付金　拠出者御芳名（敬称略）

令和３年６月現在

● 数学科支部

土屋　和平	小林祥一郎	轡田　勝祐	小山　尚之
伊藤　道一	畑中　正雄	丸山　善久	江村江里花
高橋　芳延	石田　雅義	細野　晃	玉田　鉄平
堀　行	佐藤　正道	石井　一也	関野　文瀬
岩田　隆子	加藤　俊男	田中　環	斎藤　裕
藤森　守	山口　真理	佐藤　浩一	佐々木潔朗
小田　武夫	綶　洋子	二瓶　静夫	伊藤真知子
松村　芳郎	伊東　孝芳	清水美和子	柄澤　涼司
樋浦　卓嘉	日比登史男	中井　良	高橋　峰洋
井上　昭導	吉成　毅	渡邉　譲	中野　泰河
金子　正義	原　幸仁	角井　伸一	細井奈津美
金城　義行	竹内　正文	小林　伸弥	岸　美里
永井　健樹	青木　孝史	牛丸　智博	
本家　武子	鈴木紀美子	山家　正之	
井村　悦子	浅野　学	伊藤　達也	

● 化学科支部

片桐　啓三	青木　英二	内山　昭博	後藤　紀子
土田　雅子	岩野　宣哉	中村　淑江	飯田　英典
梅沢　貞雄	宮下　育子	小川　茂樹	岩崎　匡臣
田巻　繁	吉川　義雄	本間　悟	松田　高至
長尾　典	小林　和雄	羽深　等	斎藤　博之
松澤　澄江	田中　順一	一柳　卓夫	鈴木華奈子
佐藤　茂司	溝口　郁夫	村山　茂子	山田　幹
井古田仁司	鈴木　澄廣	尾崎　恭子	近藤健一郎
後藤　邦男	土屋眞知子	谷口　素子	松岡美紗子
半田　進	星野　洋子	青柳　義昭	井上　和也
赤沢　宏	黒須　克己	三ツ寄敏雄	長沼　典子
小島　光恵	畠野　弘通	吉井　文子	伊藤　統
大関久美子	福島　幹雄	荻野　健	弓削　眞子
谷川　義夫	中條　光章	三上　正人	

● 旧職員

渡部　剛	石塚　紀夫	徳江　郁雄	長谷川美行
田村　詔生	鈴木　俊雄	掘米　恒好	

● 物理学科支部

森山　久夫	丸山　敬	白川　保憲	矢代　博行	黒沢　昌基
赤塚　節	本間　正宣	高木　広道	前田　義憲	山田　徳昭
小池　潤治	篠原　真	原　外満	中村　春彦	伊藤　静香
熊谷　周三	伊藤　繁夫	岸　澄夫	川田　尚	五十嵐誉広
土田　登	橋本　俊彦	八木　隆志	野坂　孝雄	榊原　靖夫
川崎　周隆	寺前　直子	廣田　星一	三浦　元	鈴木　克
多田　健一	小海　哲	佐藤　三男	高橋　透	山崎美穂子
木島　寛満	渡辺　俊英	高見沢一男	山岸　靖宏	本田　瑞枝
松井　紀夫	渡辺　孝一	渋谷　孝雄	水谷　先宏	越後　弥大
渋谷　龍生	垣内　信夫	中村　一昭	工藤　幸人	菅野　義博
寺井　宏	渡辺　薫	前川　典明	木村　祐伸	高田　和樹
松本　忠	坂井　貞夫	八町　芳一	風間　睦勇	藤野　唯親
小林　一男	原　外満	鈴木　俊男	佐藤　修	

● 生物学科支部

佐藤　昭子	長谷川　博	富永　弘	藤原　信一	石井　健一
相馬　研吾	細野　正道	工藤　秀人	高橋直一郎	山崎浩太郎
平林　光雄	尾張部克志	佐藤　雅枝	猪熊　正則	桐山真由子
名和　亨	長谷川英男	池田　雄二	頓所　裕史	桐山　秀明
古籏　恂	箕輪　正和	笹川　通博	榎本喜美子	笠原　杏子
冨所　利次	東城　庸介	菅原　秀記	佐々木　哲	
細谷　安彦	林　正栄	伊藤　達朗	門脇　康之	
伊東　和江	佐藤　克美	大和　淳	松本　真実	

● 地質科学科支部

倉又　孝夫	吉田　滋	大久保　進	栃原真与子	竹内　均
春日　明	鈴木　国昭	鷹田　靖志	高橋　努	関根　正道
畑中　博文	大澤　和美	中川　充	田中　力	田利信二朗
中山　輝也	浜崎　邦正	飯野　芳則	柿崎　聡	本田万葉香
山岸　俊男	岡田　正明	小山内康人	佐藤　壽則	山﨑　晴香
佐々木邦夫	佐藤　憲司	清水　功	渡部　直喜	長谷川千博
石橋　輝樹	須田　公人	大和田正明	冨加見昌孝	滝澤　拓実
近藤　和久	笹川　一郎	五十嵐　聡	佐久間　幹	
加藤　靖夫	伊豫田成子	北脇　裕士	榎本　武敏	
山野井　徹	深澤　光	滝本　俊明	小島　玄生	

● 自然環境科学科支部

松橋　麻里	天笠　泉	松井　利恭	篠木　姫里	杉山　博崇

表１　　2020年度　理学部同窓会決算

一般会計

	費　目	予算額(A)	決算額(B)	比較(B-A)	説　明
収入の部	終身会費・寄付金	5,000,000	4,751,000	-249,000	
	終身会費	4,000,000	3,760,000	-240,000	新入生　188名×20,000円
	寄付金等	1,000,000	991,000	-9,000	正会員からの同窓会整備・振興寄付金　2021.3.31現在　273名
	他会計繰入金		0	0	
	雑収入	79,000	90,821	11,821	預貯金利息、支部補助金清算、全学同窓会資料会員配送費清算、等
	繰越金	2,016,655	2,016,655	0	現金、第四北越銀行普通預金、郵貯通常貯金、郵貯振替貯金
	合計	7,095,655	6,858,476	-237,179	

	費　目	予算額（A）	決算額（B）	比較（B-A）	説　明
支出の部	会議費	175,000	37,472	-137,528	諸会議交通費、会場費
	広報費	1,773,700	1,789,042	15,342	
	「会報」発行費用	400,000	377,025	-22,975	理学部同窓会誌「会報20号」（７５00部）印刷代
	「理学部は今」発行費用	380,000	443,740	63,740	理学部機関誌「理学部は今」（7000部）費用分担
	会員宛資料配送費	988,000	962,639	-25,361	6799名分　その他資料印刷費・配送運賃
	その他	5,700	5,638	-62	HP運営費（VALUDOMAIN）
	事業費	1,265,000	301,000	-964,000	
	理学部支援事業費	720,000	301,000	-419,000	グローバル人材育成推進事業（中止）・卒業記念品等支援
	支部事業補助費	450,000	0	-450,000	コロナ禍で支援事業申請なし
	名簿編集費	20,000	0	-20,000	
	その他事業費	75,000	0	0	特別講演会（コロナ禍で次年度へ延期）
	負担金等	489,350	493,605	4,255	全学同窓会賦課金
	支部交付金	460,000	460,000	0	50,000円×６支部＋首都圏支部160,000円＝460,000円
	事務諸経費	143,000	124,436	-18,564	光熱水費、郵送料、払込手数料・料金、印刷費、消耗品、PC購入等
	事務局費	400,000	326,100	-73,900	事務局人件費
	人件費	200,000	192,000	-8,000	後援会パート手当
	予備費	1,689,605	108,878	-1,580,727	予備費・調整費（予算額にあっては繰越の見積もり額を予備費として計上）
	他会計(積立金特別会計)操出金	500,000	0	-500,000	
	合計	7,095,655	3,832,533	-3,263,122	

特別会計

	費　目	収　入	支　出	残　高	説　明
特別会計	2018年度までの積立額			16,000,298	定期預金（利息は一部を除き一般会計預金口座に振替）
	繰入金・繰出金	0	0	16,000,298	
	定期預金元金振替分の利息	171		16,000,469	その他の利息は一般会計預金に振り替え

表２　　2021年度　理学部同窓会予算

一般会計

	費　目	前年度予算額(A)	今年度予算額(B)	比較(B-A)	説　明
収入の部	終身会費・寄付金	5,000,000	5,000,000	0	
	終身会費	4,000,000	4,000,000		新入生入学定員200名×20,000円
	寄付金	1,000,000	1,000,000		正会員からの同窓会整備・振興寄付金等　目標額
	他会計繰入金	0	0		
	雑収入	79,000	80,000	1,000	利子、全学同窓会発送資料同封手数料交付金、支部補助精算金等
	繰越金	2,016,655	3,025,943	1,009,288	現金、第四北越銀行普通預金、郵貯通常貯金、郵貯振替貯金　前年度繰越額
	合計	7,095,655	8,105,943	1,010,288	

	費　目	前年度予算額(A)	今年度予算額(B)	比較(B-A)	説　明
支出の部	会議費	175,000	175,000	0	諸会議交通費は前年度額に上乗せ、その他会場費他
	広報費	1,773,700	2,450,000	676,300	
	「会報」発行費用	400,000	400,000	0	理学部同窓会誌「会報21号」印刷代　前年度決算額を参考
	「理学部は今」発行費用	380,000	450,000	70,000	理学部機関誌「理学部は今」費用　前年度実績を参考
	会員宛配送費	988,000	1,000,000	12,000	会員宛会報などの郵送料・運賃等　運賃改定・会員増を勘案
	その他	5,700	600,000	594,300	HPのリニュアール・運営費
	事業費	1,265,000	1,265,000	0	
	理学部支援事業費	720,000	720,000	0	前年実績を基礎
	支部事業補助費	450,000	450,000	0	〃
	名簿編纂事業費	20,000	20,000	0	
	その他	75,000	75,000	0	当別講演会事業
	負担金等	489,350	489,350	0	全学同窓会賦課金　500万円×学部定員数で按分＋定額30,000円
	支部交付金	460,000	460,000	0	50,000×６支部＋首都圏支部160,000
	事務諸経費	143,000	123,000	-20,000	光熱水費、事務通信費、払込手数料・料金、印刷代、消耗品、パソコンOS
	事務局費	400,000	400,000	0	事務局人件費　前年度決算を参考
	人件費	200,000	200,000	0	後援会パート手当　例年通り
	他会計操出金	500,000	1,500,000	1,000,000	2021年度積立金
	予備費	1,689,605	1,043,593	-646,012	
	合計	7,095,655	8,105,943	1,010,288	

特別会計

	費　目	収　入	支　出	残　金	説　明
特別会計	2020年度までの積立金			16,000,469	定期預金（利息は一部を除き一般会計預金口座に振替）
	2021年度積立金	1,500,000		17,500,469	
	2021年度利息			17,500,469	定期預金利息の内、定期元金に振替えられる分　前年並みを計上

事　務　局　よ　り

1、理学部同窓会「代議員会」開催

新型コロナ感染禍の為メールにより審議とした。

◉**議　事**

（1）2020年度事業報告・決算報告（11頁表１）
（2）2020年度事業計画・予算案（11頁表２）
（3）新役員、代議員数について
- 提案のとおり承認された。

2、2020年度事業報告

（1）広報活動
- 正会員に会報21号はじめ雪華などの広報紙を送付。

（2）理学部からの要請にもとづく各種支援
- 例年経費補助をしていた理学部卒業祝賀会は新型コロナ禍の為中止となり卒業記念品に変更。

（3）全学同窓会との連携について
- 賦課金・分担金を応分負担し、財政的に貢献。
- 理事会､運営委員会に参加し､運営に貢献。

（4）会費及び寄付金について
- 後援会と連携し､2020度新入生より会費を徴収。
- 財政力強化のため寄付金のお願いにより、多くのご寄付を頂いた。

（5）特別講演会　新型コロナ禍の為次年度に延期。

3、臨時総会の開催　2021年２月　メール審議

議　　事

数学科支部の武石文雄 氏を会長にお願いする。

2021年度　理学部同窓会役員名簿

役 職	支　部	氏　名	役 職	支　部	氏　名
会 長	数　学　科	武石　文雄	幹 事	化　学　科	本間　　悟
副会長	数　学　科	武石　文雄			田辺　　薫
	物 理 学 科	㮤沢　祐一		生 物 学 科	清水　榮一
	化　学　科	畠野　弘通			長谷川　博
	生 物 学 科	荒木　　勉			堀　　昌明
	地質科学科	豊島　剛志		地質科学科	関谷　一義
	自然環境科学科	尾原　祥弘			佐藤　壽則
	首　都　圏	安藤　勝利			渡部　直喜
幹事長	地質科学科	渡部　直喜		自然環境科学科	畑澤　尚宏
幹 事	数　学　科	樋浦　卓嘉			加藤　直之
		武石　文雄			柿原　芳章
		田中　　環		首　都　圏	安藤　勝利
	物 理 学 科	鈴木　重行			飛鳥　　滋
		坂井　　章			信田　庸二
		笹川　民雄	監 事	地質科学科	高橋　俊郎
	化　学　科	三ッ寄敏雄		物 理 学 科	渡部　　俊

退職された先生方（令和３年３月）

数学プログラム

家富　　洋（教授）

在職期間：平成７年１月～平成24年３月
　　　　　平成25年５月～令和３年３月
専門分野：経済物理、データマイニング

物理学プログラム

大原　謙一（教授）

在職期間：平成５年４月～令和３年３月
専門分野：宇宙物理学

物理学プログラム

宮田　　等（教授）

在職期間：昭和61年11月～令和３年３月
専門分野：高エネルギー物理学

自然環境科学プログラム

湯川　靖彦（教授）

在職期間：昭和62年４月～令和３年３月
専門分野：錯体化学

久保田喜裕（准教授）

在職期間：平成８年４月～令和３年３月
専門分野：資源・環境地質学

新潟大学理学部同窓会（事務局）

住　所　〒950-2181
　　　　新潟市西区五十嵐２の町8050
　　　　新潟大学理学部内
ＴＥＬ　025-262-6261　ＦＡＸ　025-262-6261
E-mail　ridoso@ad.sc.niigata-u.ac.jp
ＵＲＬ　http://www.ridoso.jp/

編集後記

昭和28年３月に理学部第１期生が卒業してから昨年第68期生が巣立ち、そして今年、理学部第69期生として理学科７プログラムから初めて卒業生を送り出しました。また、コロナ禍のため授業が非対面になったことも初めてのことでした。理学部の長い歴史の中で同窓会も新たな時代に入ったようです。

編集担当は数学科支部でしたが、皆様のご協力と同窓会事務局のご尽力のおかげで無事に皆様のお手元に本誌をお届けすることが出来ました。原稿をお寄せいただきました関係諸氏に心より感謝申し上げます。新潟大学でも職域接種を学生、教職員、そして西区市民を対象として７月から開始しました。２学期からは対面授業が少しずつ増えてくることを願っております。